

自己の映像を利用した英語プレゼンテーション改善に関する研究 —ビデオ撮影の有無、および撮影者の反応の有無の比較—

小林 輝美^{1, 2}

¹ 教育テスト研究センター ² 杏林大学外国語学部

本研究では英語によるプレゼンテーションを改善するには自分自身を録画した映像を撮影、視聴すること、および撮影者の反応が有効であると考え、検証した。撮影者の反応の有無を比較した所、1回目、2回目のプレゼンテーション共に有意差はなかった。ビデオ撮影の有無を比較した所、1回目のプレゼンテーションには有意差はなく、2回目のプレゼンテーションでは有意差のある項目があった。ビデオ撮影、ビデオ視聴がない群は他の群に比べ、自己評価が高かった。

キーワード：プレゼンテーション，映像，振り返り，自己モデリング，聴衆

1. はじめに

学校、ビジネス、いずれの場においてもプレゼンテーションを実施する機会はある。プレゼンテーションを改善する方法のひとつに、プレゼンテーションの様子をビデオ撮影するという方法が考えられる。以前はプレゼンテーションをビデオカメラを用いて撮影したものだが、今日ではスマートフォンやタブレット PC などのモバイル端末で簡単に撮影や編集もできるようになった。撮影した自己の映像を視聴する際に期待される効果にモデリング(Bandura, 1969)がある。モデリングとは社会的学習理論の一部であり、他人の様子を見ることで学習することができるというものである。メディアの発達につれ、映像を通じてもモデリングが可能となった。さらに、映像を利用することで他人だけでなく自分自身をモデリングする自己モデリング(Dowrick, 1983)も可能である。

これまでの映像を使用した振り返りの研究では、映像を視聴する方法に注目し、ひとりで視聴するかペアで視聴するか(小林, 2018a)、良かった点のみをフィードバックするか良かった点と改善点をフィードバックするか(小林, 2018b)などが検証されてきた。映像を視聴する際、自分ひとりよりもペアの方がより多くの項目で自己評価が高くなること、良かった点をフィードバックされると自信が付くと思われること、改善点をフィードバックされることで、英語に関する項目で自己評価が高くなることが明らかになっている。

プレゼンテーションをするということは直接的か間接的かを問わず、必ず聴衆が存在すると考えられる。また、聴衆の存在が個人のパフォーマンスを向上させること(Chib, Adachi, O'Doherty, 2018)、映像撮影者がいる方が自己評価が高くなること(小林, 2019)が明らかになっている。そこで、本研究では、ビデオ撮影者が聴衆と同じような働きをするのではないかと考え、ビデオ撮影の有無、および撮影者の反応の有無による違いがあるかどうかを検証した。

2. 目的

ビデオ撮影をすること、ビデオ撮影者がうなずきながら撮影をすることがプレゼンテーションを改善するだろうと仮説を立て、検証する。

3. 方法

3.1 実験デザイン

関東にある大学に所属する学生 30 名（男性 15 名，女性 15 名）に英語でプレゼンテーションを行ってもらった。その際、「ビデオ撮影あり」，「ビデオ撮影なし」，「撮影者のうなずきあり」，「撮影者が無反応」の 4 種類を各被験者が行う被験者内実験の手法を選択した。プレゼンテーションのトピックも 4 種類用意し，ラテン方格法により各被験者の順序を決定した。また，プレゼンテーションは練習（1 回目）と本番（2 回目）とし，全被験者は 2 回ずつ 4 種類，合計 8 回のプレゼンテーションを行うこととした。

最初にプレゼンテーションの原稿を記入したり，プレゼンテーション後に実施する自己評価を記入したりする冊子を配布した。1 回の実験の流れは，原稿作成，練習（1 回目）のプレゼンテーション，自己評価，本番（2 回目）のプレゼンテーション，自己評価である。原稿を暗記することが望ましいと伝えた上で，プレゼンテーションの準備をしてもらい，ペアになり，お互いのプレゼンテーションを各自のスマートフォンで撮影した。

3.2 調査内容

練習時と本番時のプレゼンテーションについて 19 個の評価項目を用意し，5 段階で回答してもらった。（1. まったくそう思わない，2. あまりそう思わない，3. どちらとも言えない，4. 少しそう思う，5. 非常にそう思う）評価項目は以下の通りである。「よく準備をした。」，「暗記できた。」，「内容が適切だった。」，「自信を持って発表できた。」，「快適だった。（緊張などせず，気持ちよくできたかどうか）」，「アイコンタクトを取ることができた。」，「ジェスチャーが適切だった。」，「表情が適切だった。」，「身だしなみが適切だった。」，「姿勢が良かった。」，「声の大きさが適切だった。」，「声がはっきりしていた。」，「流暢だった。」，「発音が適切だった。（カタカナ英語ではなかったかどうか）」，「イントネーションが適切だった。（疑問文ではない所で上がらない，など）」，「トーンが適切だった。（低すぎない声だったかどうか）」，「間が適切だった。」，「伝えたいことが伝わった。」，「全体的に見て，適切なプレゼンテーションだった。」。

4. 結果

練習のプレゼンテーションと本番のプレゼンテーションの自己評価を SPSS Version 22 を用いて統計処理した。ビデオ撮影あり群，ビデオ撮影なし群，撮影者のうなずきあり群，撮影者の無反応群の 1 要因，4 水準の分散分析，および Tukey 法による多重比較を行った。

4.1 ビデオ撮影の有無の比較

ビデオ撮影ありとビデオ撮影なしの群を比較した所，練習のプレゼンテーションでは有意差がある項目はなかった。一方，本番のプレゼンテーションでは，5%水準で「間が適切だった。」という項目で有意差があった。10%水準では「内容が適切だった。」，「アイコンタクトを取ることができた。」，「トーンが適切だった。（低すぎない声だったかどうか）」という項目で有意差があった。

4.2 撮影者の反応の有無の比較

撮影者のうなずきあり群，撮影者が無反応群を比較した所，練習，本番のプレゼンテーション共に有意差がある項目はなかった。

4.3 ビデオ撮影ありと撮影者が無反応の比較

ビデオ撮影あり群と撮影者が無反応群を比較した所，練習のプレゼンテーションでは有

意差がある項目はなかった。一方、本番のプレゼンテーションでは、10%水準で「声の大きさが適切だった。」という項目で有意差があった。

4.4 ビデオ撮影なしと撮影者が無反応の比較

ビデオ撮影あり群と撮影者が無反応群を比較した所、練習のプレゼンテーションでは有意差がある項目はなかった。一方、本番のプレゼンテーションでは、5%水準で「快適だった。（緊張などせず、気持ちよくできたかどうか）」、「声の大きさが適切だった。」という項目で有意差があった。10%水準では「自信を持って発表できた。」、「声ははっきりしていた。」、「間が適切だった。」という項目で有意差があった。

5. 考察

練習のプレゼンテーションでは有意差のある項目がなかったため、本番のプレゼンテーションについてのみ考察する。ビデオ撮影なし群は全項目において4つの群の中で最も高い平均値を示していた。4つの群のうち、ビデオ撮影なし群だけは自己の映像を視聴しておらず、自分のプレゼンテーションを客観的に見ていないことから、自己評価が高くなったのではないかと思われる。ビデオ撮影者の有無だけでなく、ビデオ視聴の有無も考慮した実験デザインにするべきだったかもしれない。

ビデオ撮影あり群とビデオ撮影者が無反応群との比較において、ビデオ撮影あり群の方が「声の大きさが適切だった。」という項目において自己評価が高かったことから、ビデオ撮影者の反応が声の大きさに影響するかもしれないが、通常、ビデオ撮影する場合、大きなリアクションをすることはないことから、実験環境に大きな違いはなかったのではないかと思われる。

6. まとめ

今後の課題として、実験デザインを見直すこと、練習と本番のプレゼンテーションの伸びを比較する、今回の実験で得た他のデータとの相関を検討するなど、結果を再度見直したい。

参考文献

- Bandura, A. J. (1969) Principles of behavior modification. New York: Holt, Rinehart & Winston.
- Chib, V. S., Adachi, R., O'Doherty, J. P. (2018) Neural substrates of social facilitation effects on incentive-based performance. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, Volume 13, Issue 4
<https://academic.oup.com/scan/article/13/4/391/4965846> (参照日 2019年5月31日)
- Dowrick, P. (1983) Self-modeling. In Dowrick, P., & Biggs, S. (Eds.), *Using video: Psychological and social applications*. New York: Wiley Interscience.
- 小林輝美 (2019)『自己の映像を利用した英語プレゼンテーション改善—映像撮影者の有無による自己評価の比較—』日本教育工学会研究報告集, JSET 19-1: 163-170
- 小林輝美 (2018a) 英語プレゼンテーションを撮影した自己の映像を活用するための視聴方法の検証「1人とペアによる映像視聴時の自己評価を比較」, 学習情報研究論文誌, 第263巻, 第5号: 48-53
- 小林輝美 (2018b) 自己の映像を利用した英語プレゼンテーション改善に関する研究—フィードバック方法による違いの検証—, 教育テスト研究センター年報, 3: 43-45

